

ロシアバレエとウクライナ戦争

斎藤慶子（大阪公立大学）

2022年2月24日に、ロシア軍はウクライナへの全面的な侵攻を開始した。直後はソーシャルネットワーク上に反戦を訴える投稿があふれ、ロシアの舞台芸術関係者による署名活動も行われた。しかし3月4日にロシア下院でロシアの軍事行動について虚偽の情報を広げた場合に刑罰が科されることが採択されると、反戦運動は段階を追って下火になっていった。国立のバレエ団に属するダンサーたちも一部の例外をのぞけば沈黙を貫き通している。沈黙が政権の方針との合意を意味するものではないことは、9月21日に発表された部分的動員が人々の間に巻き起こした混乱が明らかにしている。本報告では、ウクライナ侵攻の発生を契機に問題として眼前に浮かび上がってきた芸術と社会の関係について考察するために、近年のロシアバレエの状況を振り返りたい。

国立であること

ロシアでは、多くのバレエ団やバレエ学校が国に所属しており、国の助成金を元に運営がなされている。そのことは、運営の継続性を一定程度保証するものであり、不断の人材育成が不可欠のバレエ芸術にとってのぞましい形であると言える。その一方で、芸術的な自由が侵される場合もあり、たとえばソ連バレエの歴史はアーティストの抵抗の歴史といった側面を持つ。それが、人命にかかわる問題でも意見表明を許されないという状況を生み出すことを暴露したのが、今回のウクライナ侵攻なのである。本項では、国立のバレエ団やバレエ学校が国に対してどのような責務を負っているのか、組織の規約を精査する。

国力としての芸術

ロシアでは国民統合や対外的関心のために文化に大きな期待をかけており、2000年代から各種給

付金を支給することで文化活動を支えてきた。その裏に隠れている危険性をまるで告発するかのよう演出が初期にロシアバレエの舞台で行われていた。

2004年5月30日にマリインスキー劇場で初演されたドミトリー・チェルニャコフによる新演出版のオペラ『皇帝に捧げし命』（ミハイル・グリムカ、1836年）のバレエ場面である。ポーランドの舞踏会の場面にラディカルな演出を施し、セルゲイ・ヴィハレフが振付をおこなった。原作ではロシアに攻め入るポーランド側の舞踏会の場面だったが、新演出ではロシア国民に対して圧政を布くのは同国政府で、芸術も武器として利用されることが強調された。発表当時から論争の的になっていたが、2022年にその場面のみ元の振付に戻されたことは偶然ではないように思われる。

ナショナリズムとの相克

マルレーヌ・ラリュエルは著書『ファシズムとロシア』（東京堂出版、2022年）の中で、プーチン大統領が第二次世界大戦でのロシアの勝利の記憶を現在の国民統合のために利用し、ソ連についてのノスタルジーを掻き立てるような文化政策をとってきたことを指摘した。2000年代、2010年代は、バレエの世界でもソ連バレエの復元がさかんに行われてきたことに思い当たる。その中で、ソ連バレエの読み替えを行ってきたラトマンスキーの作品は特別な価値のあるものだと今あらためて実感される。

ロシアによるウクライナ侵攻の情勢は今も動き続けており、報告当日には部分的な変更の可能性があるので先にことわっておきたい。